



episode 24 母の魔法と同じ音が聞こえる

投稿者 Marie さま(和歌山県)



『わたしのワンピース』
にしまさかやこ 作
こぐま社 1969年

カタコト カタコト 足踏みミシンの音が聞こえる。

小さい頃は、妹も私も母の作ってくれたワンピースやパジャマを着て育った。

ちょっとおめかしして、大阪の間屋さん时不时々お出かけした。

母の作ってくれたワンピースを着て、電車に乗り、手をつないでトコトコお出かけするのが大好きだった。

間屋さん街ではたくさんの生地が売っていて、母はいくつものお店を丁寧に回るのだ。

たいくつしてきた私たちに、「あともうちょっと。もうちょっと。ここが終わったらジュースにしようか」と、手に取って、柄を比べて考える。「おうちにたくさんあるのに」というと、

「これは誰々に、これはあんた達のワンピースにしようかな」と、楽しそう。

次のお出かけには、どんなワンピースにしようか。

母は、うちにあるミシンの部屋に入ると、たくさんの布があって、1枚1枚広げていく。

「これはお花があるし、いいね。こっちは、さらっとしてるから夏のパジャマにしようか」と。

畳はお花畑や星空に変身する。

チョキチョキとハサミで切って、カタコト カタコト。平たい布が、あっという間にワンピースになる。

まるで魔法がかかったように、出来上がるのを見るのが大好きだった。

私がこの絵本が大好きだったのは、あのカタコト カタコトとできあがるワンピースが、母の魔法と同じだったから。

3年前、そんな母が病を患い、ミシンに向かうこともできなくなっていた。

ちょうどお見舞いに来てくれた従妹が、「これから沖縄に行くの。お土産何がいい？」と母に聞いた。

「琉球柄の生地が欲しいわ。かわいいポーチをたくさん作りたいから」と返事をしていたが、

その後すぐに帰らぬ人となった。

たくさんの布があって、母のミシンはそのままだ。亡くなるまでカタコト カタコト、誰かのために手作りしていた母。きっとお空でも作っているね。絵本のように。カタコト カタコト、いまでもミシンの音が聞こえる。

〔絵本の日アワード in FUKUOKA 2021〕投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



子どもが評価した絵本

「ラララン ロロロン」なんとも軽快なリズム音でしょう。この心弾むフレーズが響きはじめたのは、白黒テレビが主流であった時代に、カラーテレビが家庭に入り出した昭和44(1969)年のことでした。その後、平成、令和と時代が移り変わっても、このリズム音とワンピースを着たうさぎは子どもたちを魅了し続け、令和6(2024)年には誕生55周年を迎えたのです。

こんなに長く愛されるお話になるとは、発刊された当時、作者の西巻茅子氏も出版社も思いもしなかったでしょう。なぜなら、出版後、評価されることも、書評で取り上げられることもなかったからです。

人気者となるきっかけは、子ども図書館で起きた現象でした。発売から5、6年経ったころ、朝日新聞の子どもの本紹介コラムで、常に貸出中で「図書館にない本」として東京子ども図書館が紹介すると、『わたしのワンピース』は売れ始めたのです。この記事を読んだ西巻氏は、「子どもたちには、ちゃんと伝わっていたんだ」とわかって、「すごく嬉しかった」と喜びを露わにしています。

やがて、刊行10年が過ぎるころにはベストセラーとなり、西巻氏の代表作ともなって、時代を超えて愛される絵本になったのです。

情熱が引き合わせる出会いは必然なのです

芸術大学を卒業後、絵画教室「子どものアトリエ」を開いていた西巻氏は、1966年に日本版画協会展新人賞、翌年は奨励賞を受賞するのです。

この作品展で西巻氏の作品を見たのは、創業したばかりの、こぐま社創設者の佐藤英和氏でした。創立2年目のこぐま社から西巻氏にお呼びがかかり訪れると、「なんでもいいから好きなテーマで絵を描いてきて」と言われ、リトグラフで絵を描いて、何回かやりとりを繰り返すうちに出来上がったのが、デビュー作『ボタンのくに』でした。

佐藤氏が、西巻氏の絵を観た版画協会展は1967年4月、西巻氏がこぐま社を初訪問したのは同年5月、『ボタンのくに』出版が8月と、絵本に情熱を捧げる人々の出会いは、一気に形となったのです。

文章のない絵本を作るつもりが…

リズムカルな音と、うさぎが発するひとり言、そして次々と変化する色とりどりのワンピースの模様が読む者を魅了する『わたしのワンピース』ですが、当初、西巻氏が目指したのは文章のない絵本でした。

しかし、編集者からなかなか理解を得られず、話し合った結果、文章をつけることになり、それなら、本をめくっていくときの伴奏みたいな文がいいと西巻氏は思い、「ラララン ロロロン」が生まれたのです。

その一方で、「花畑を通ったらワンピースが花模様になるのがわかりづらいから、花畑を寝転がるなど理由がわかる要素を入れてほしい」との指摘に対しては、自身の主張を変えませんでした。最終的に、西巻氏の意見を通すと佐藤氏が判断したことで、今に続くファンタジー絵本が確立したのです。

「絵本おじさん」からはじまった

創立2年目のこぐま社を訪問したときの西巻氏は20代でした。そこには、創設時のメンバーである馬場のぼる氏や、児童文学者の森久保仙太郎氏らが夢中で絵本の話をしていて、若い西巻氏には不思議でなりません。しかし、大人が子どものために良いものをつくり出そうとしているとわかり、大先輩諸氏に対し敬愛をこめて「絵本おじさん」なんて愛称を付けているのです。

そんなこぐま社も、2026年には創立60周年を迎えようとしています。

文献

- 1) 西巻茅子：名作が生まれた日1969年「わたしのワンピース」, 月刊MOE 36(7), pp.90-95, 2014.
- 2) 西脇由利子, 他：『わたしのワンピース』論-その特質をめぐる, 絵本学会紀要(12), pp.27-39, 2010.